

「これからの学生支援について」

— 明星大学総合健康センター「スチューデント・サロン」の動向 —

木村 淳子* 中島 清貴* 伊藤 淳子* 坂井 真理子* 永井 尚志*

石野田 美奈* 黒 岩 誠**

日本学生相談学会「学生相談機関ガイドライン」(2013)では、学生相談体制が備えるべき「設備」の一つとして、「談話室・フリースペース」が挙げられている。このような学内の「居場所」の存在は、ここ数年、学生相談と共に新たな学生支援の在り方としても、注目を集めており、本校の「スチューデント・サロン」は、この分野では歴史も古く、先駆者的存在でもある。昨年行った二つの発表を通して、その機能をより明らかにし、又、今後の学生支援、ひいては大学教育の在り方の一つを提案する。

キーワード：居場所、大学適応、学生支援

「スチューデント・サロン」(以後「サロン」)では、「サロン」前身の「カウンセリング・センター」時代の活動を発表した論文(大町他2008)を始め、学生支援の新しいアプローチとして、その活動について、学生相談学会(加藤他2015)で、他、一昨年には心理臨床学会でポスター発表(中島他2016)を行ってきた。フロアからの反響も大きかったこともあり、2017年昨秋の心理臨床学会では、①個人の成長をモデルとした事例研究[大学での日常場面における他者とのつながりを支援した一事例 中島清貴]と、②学生支援の為の学生相談室との関連機関として、似た機能を持つ三大学からの共同発表の形のもの[心理スタッフが常駐する談話室における活動実践について] - 3大学の実践事例比較(1) - 私立総合大学A大学「スチューデント・サロン 伊藤淳子」との、二つの発表を行った。3大学の事例比較における他の2校からの発表は、[学生相談室を支える談話室の役割についての一考察 - 3大学の事例比較(2) - 国立総合B大学の「談話室」において - 佐藤則行 福島大学]、[学生相談「フリースペース」のもつ臨床心理的援助機能の検討 - 3大学の事例比較(3) 私立小規模C大学「学生サロン」 - 澤田明子 いわき明星大学]である。

21世紀を迎え、大学生全入時代到来が叫ばれて20年…大学には様々な学生が押し寄せ、不適應をきたす

学生も少なくない。今や「学生相談室」は、どの大学にも設置されるようになった。しかし、相談の必要性を自覚できる学生は、そこに繋がれるものの、実際のところ、そこに到るまでの動線はまだ開発途上と云える。又、大学生の未成熟化も叫ばれて久しく、実際は、その手前のところで行き場所に困っている学生も多い。加えて、ここ数年は“発達障害”が一般化し、その傾向が見える学生も増加し、どの大学でも、多様な学生へのアプローチに苦勞している。そこで今改めて、個別相談とは異なる、学生なら誰もが気軽に立ち寄れる居場所機能を主とする「自由な空間」が、新たな学生支援として、求められ始めている。

日本学生相談学会「学生相談機関ガイドライン」(2013)でも、学生相談体制が備えるべき「設備」の一つとして、既に「談話室・フリースペース」が挙げられている。大学により、呼び名は「談話室」等々ではあるが、このような「居場所」の存在は、ここ数年、他大学からも注目されており、学会発表においても多くの参加者が集い、質問の多さからも、その関心の高さが伺われた。奇しくも、それぞれの発表で、本校の「サロン」の機能をより明らかにし、又、今後の学生支援、ひいては大学教育の在り方の一つを示唆するコメントがいくつか得られたので、ここに紹介したい。

① 中島(2017)では、来所当初、基本的に人との関わりが難しかった学生達が、スタッフとの関わりから始まり、次第に他学生や学内機関とも繋がりが、学生生活を楽しみ始め、自身の問題にも向き合い

* 明星大学 総合健康センター

** 明星大学心理学部

育っていく様子が事例を通して紹介された。参加者からは、学生と直接有意義な関わりが持てる貴重な居場所と、「サロン」の果たす役割について心強い感想が相継ぎ、中には「サロン」の存在が退学を食い止める役割を果たしているとのコメントもあり、座長からも、大学にこうした側面も是非強くアピールすべきとのアドバイスが与えられた一方、スタッフが全員非常勤であり、緊急時の危機対応等についての疑問も提示された。

② 伊藤ら(2017)では、各大学が自校の学内での談話室の位置付けを説明しつつ、それぞれ事例を通して、サロンの機能を紹介。各大学での在り方によっても、当然にそのサロンの特性があらわれるが、福島大といわき明星大では、学生相談室の受付窓口と待合室とが一緒になった「談話室」や「学生サロン」の形態で、スタッフも重複する形であった。

福島大からは、個別ケースの談話室用頻度等を挙げ、“長期で休む学生にとって、暫く遠のいていた大学への登校の足掛かりとしての居場所”と“社会スキル訓練等のグループ活動の導入もあり、個別課題を繰り返し実践していく事で、自己受容への支援にもなり得る”との考察を展開。

いわき明星大からは、日本学生相談学会「学生相談機関のガイドライン」で挙げられている「談話室・フリースペース」の必要性を改めて掲げ、それを基に、臨床心理学的援助機能の視点から、フリースペースの今日的意義や可能性について検討。施設の実態に基づき、エピソードを織り込みながら、その機能について、1. 学相部門のキャッチメントエリア 2. 「日常」を支える 3. 移行(次のステップへの変革期)を支える 4. multi-dependent の起点となる 5. メンバーが共に歩みながら変化していく一共進化 co-evolution を生み出す 6. インクルーシブ教育実践の場としての「スペース」創出 との6ポイントが発表された。

3校中、最初の発表であった本校からは、同じ建物内ではあっても、他の2校とは異なり、唯一、学生相談室とは、スタッフは勿論、物理的にも完全に独立した空間である事を紹介。3事例を挙げながら、基本的に対人関係の難しさを抱える学生達が、どの学生も“ありのままを受け止め”られ、スタッフとのつながりを起点に、他学生や学内機関等との“つながりを育み”つつ、“主体性を育てる”ことを目指す取り組み姿勢を発表。ケースによっては、学生相談室、ユニバーサルデザインセンター、学生サポートセンター等と学内の関連機関と密接に連携も図りながら、日常に起き

る「サロン」内での即時性のある、きめ細かい関わりが学生の主体性や社会性を育ててきている実態が紹介された。

改めて、本校の「サロン」を紹介する。前身の「カウンセリング・センター」は、他校にもよく見られる学生相談室と待合室を兼ねたような形で、誰でもいつでも来室でき、必要に応じて個別相談も行われるスタイルで開設され、学内での学生相談のスタートとほぼ同時にスタートしている。即ち「サロン」の紹介には、現在その母体となっている『総合健康センター』の歴史の紹介も避けられず、ここでその両方を合わせ簡単に記載しておく。(表1参照)

現在、『総合健康センター』は、「保健管理センター」を管轄する保健管理部門と「学生相談室」を管轄する学生相談部門で構成されており、「サロン」は、場所もスタッフも独立した形であるが、「学生相談室」の下位組織として位置付けられている。「サロン」の開設当初については、『総合健康センター』スタート以前から既に「保健管理センター」の運営に携わっていた浜島浩史先生、退職された松橋みち子看護師、或いは「サロン」の前身「カウンセリング・センター」を知る大町知久氏の報告からみると、本大学の歴史を紐解く形となる。

先ず、昭和39年(1964)明星大学が開学。昭和40年(1965)、文学部が開設。昭和41年(1966)には、旧本館1Fに「医務室」が、更に2年後の昭和43年(1968)には、12号館1Fに「保健センター」が開設。翌昭和44年、学園紛争最中の激動の1969年9月に「学生相談室」が開設されているが、その当時は多くの大学がそうであったように、一般の大学教員が交替で相談に当たる形での運営であった。昭和46年(1971)大学院人文研究科開設。心理スタッフによる学内サービスは、昭和52年(1977)より「保健センター」内に設置される形で開始され、以後、学内の精神衛生相談を担っていた。その後、平成3年(1991)に東京都に診療所登録したのを機に、「保健センター」は「保健管理センター」の名称となった。平成10年(1998)には、旧本館3Fにて「保健管理センター」分室として、現「サロン」の前身となる「カウンセリング・ルーム」が開設される。臨床心理士資格(1988)に伴い、平成13年(2001)本校は臨床心理士資格取得認定校の一つとして、学外向けの「心理相談センター」を開設。平成16年(2004)には「保健管理センター」「学生相談室」「カ

ウンセリング・ルーム」が、現16号館に移転しているが、暫くはその中の整備に時間を費やすことになる。

21世紀と共に押し寄せた少子化の荒波に備えるべく、どの大学も生き残りを懸け試行錯誤する中、本校でも、氏原淳一元学長により“学内心理相談体制整備”が掲げられ、“幼稚園児から大学院生まで一貫したサポートを！”との願いも込め、日野、青梅の両キャンパスに、幼小中高のある府中キャンパスを含めた3キャンパスを通して行われる事となり、先ずは、規模の小さい府中キャンパスの整備から少しずつ進められた。そして平成20年（2008）、小川哲生前学長に引き継がれた“心と身体のサポートシステム強化”の願いは、現『明星大学総合健康センター』として、漸く誕生する事となる。

黒岩誠センター長の下、副センター長として保健管理部門を浜島浩史先生が、そして学生相談部門を私木村淳子がそれぞれ担当する形で整えられ、学生相談室は3つのキャンパス毎に分室長を配備。又、この時点から、それまで教員による相談等、まだ混沌としていた学生相談の環境が整備された。新たな「学生相談室」は心理の専門家としての臨床心理士による形とし、個別相談も交えていた「カウンセリング・ルーム」は「サロン」と名称も新たにし、臨床心理士や心理学及び臨床心理修士修了者を配備しつつ、個別相談とは異なる形で心理的サポートを施せる形に整えられた。学生なら誰もが利用出来るフリースペースとして、オープンで自由な居場所を提供する現在の形の誕生した。

日野キャンパスでは、『総合健康センター』は16号館に集約され、1Fの「保健管理センター」が「保健管理室」に、又、中2F右のスペースには「サロン」が、それに繋がる2F左に、個別相談の為の「学生相談室」が2部屋設置となり、月～土の9～17時での開室に合わせ、毎日臨床心理士2名が配備。月に2回精神科医による面接も始まり、必要に応じて、医療に繋ぐ形も整えられた。又、2015年からは、休学や退学の窓口となっている「学生サポートセンター」にも総合健康センターから臨床心理士スタッフを派遣「学生相談室」と「サロン」では、月1回合同ミーティングを開いている。前年に誕生した「ユニバーサルデザインセンター」の臨床心理士スタッフを加え、情報の共有や連携を図ってきている。

2004年から学生相談室がスタートしていた青梅キャンパスでは、開室日を週4日とし、2008年には「サロン」が隣接して開設され、2015年3月末の閉室まで、学生を見守った。

本校の「サロン」は、今、学生相談機関に必要な設備と云われる“フリースペースの先駆者的存在”として、毎年全国の大学から見学者が訪れる程に、注目を集めている。

「サロン」の機能は、1：人との繋がりを学び経験する（関係を作る・維持する力を育む）2：学生（社会人）として必要な知識や経験を補強する（問題解決の力を育む）場を提供していると、云えるだろう。「サロン」には、特に細かいルールはない。開室時間内ならいつでも自由に出入り可能で、希望すれば料理、手芸、園芸や飼育等、いくつかのクラブがあって参加も可能。月に一回食事会があり、スタッフと共に、買い出しから調理及び後片付けまで、全て参加は自由。

一般に、大学で不適応を起こす学生は、対人関係に問題を抱えている事が多く、人と上手く繋がれずにいる。最初は無言で黙っていてもそのまま受け入れられ、ただ居場所としてそこに居るだけで、次第にスタッフと繋がり、そこから必要な学内資源、或は他の学生へと繋がりの輪が広げられて行く。又、その過程で、必要な知識や経験の必要性が判れば、時間をかけて学んでもいける。そんな中で、当然に次第に人との関わり方も含め、自分の問題点も見えて来る。必要に応じて、改めて個人面接に繋がるケースも少なくない。

精神科領域で、入院中心の治療体制に対し、コミュニティケアと云う社会療法的アプローチが欧米で提唱導入されてきたのが半世紀程前、日本でも各所でデイケアの名の下に広まってきているが、それが今や大学の学生支援にも取り入れられて来た形とも云える。

「安全な居場所がある、生活リズムの安定、仲間がいる安心感、対人コミュニケーションの練習、社会技能の獲得」これはデイケアの目的として掲げられているが、「サロン」にもほぼ重ってくる。勿論「サロン」は医療現場ではないが、対人関係に問題を抱え、社会に出るのに不安を抱える学生が、心理の専門家の見守りの中で、対人スキルや社会性の習得のチャンスが得られるとすると、これは学生のみならず、学内の教職員にとっても、大きな助けとなる筈である。しかもそれが、結果的に退学のくい止めや、卒業や就職にも繋がるので、大学運営からのメリットは大きい。

現在「サロン」は月～金の9～17時で5日開室。毎日20～30人の学生が集い、年間4000人以上の利用があり、毎日2人の臨床心理士と修士修了一年目のスタッフ1名との3人で対応しているが、スタッフ構成の必要限度の人数である。一般に心理スタッフと云うと、個別相談対応のイメージが大きいと思うが、

表1, 年表

年表	
昭和39年 (1964年)	明星大学 (理工学部) 開学 初代学長 児玉九十
昭和40年 (1965年)	人文学部 開設
昭和41年 (1966年)	「医務室」開設(旧本館 1 階)
昭和43年 (1968年)	「医務室」12号館 1 階に移転、「保健センター」として開設
昭和44年 (1969年)	「学生相談室」開設 [大学教員対応] (20号館 2 階)
昭和46年 (1971年)	大学院人文学研究科 開設
昭和52年 (1977年)	心理スタッフによる精神衛生相談開始 (「保健センター」内に設置)
平成元年 (1988年)	臨床心理士 資格誕生
平成 3 年 (1991年)	「保健センター」東京都へ診療所登録 これを機に「保健管理センター」へ名称変更
平成 4 年 (1992年)	青梅校に情報学部、日本文化学部 開設
平成10年 (1998年)	保健管理センター分室として旧本館 3 階に「カウンセリング・ルーム」開設
平成13年 (2001年)	学外向け相談機関として「心理相談センター」24号館に開設
平成16年 (2004年)	「保健管理センター」「学生相談室」「カウンセリング・ルーム」16号館に移転 青梅キャンパス 「学生相談室」開室
平成20年 (2008年)	保健管理部門と学生相談部門を統合した『明星大学総合健康センター』誕生 日野、青梅、府中の3キャンパスにて学内心理相談体制を整備 日野キャンパスは16号館 1 階・中 2 階・2 階に集約精神科医による面接サービス 開始 青梅キャンパス「ステューデント・サロン」開設
平成22年 (2010年)	人文学部に心理学科 開設 「学生サポートセンター」開設 「明星教育センター」開設
平成26年 (2014年)	「発達支援研究センター」開設
平成27年 (2015年)	「ユニバーサルデザインセンター」開設 青梅キャンパス閉校に伴い、青梅「学生相談室」「ステューデント・サロン」閉室 「学生サポートセンター」に臨床心理士スタッフ派遣
平成29年 (2017年)	心理学部心理学科 開設
平成30年 (2018年)	公認心理師 国家資格試験 開始

(注：詳細は、2009 年発行の「総合健康センター活動報告書 第一号」を参照)

上記に記したように、「サロン」スタッフの仕事は、日々来所する学生への日常の相談や見守りであり、毎日9－17時の8時間、ほぼ休みなく種々の問題を抱えた学生を見守り、“安全な居場所”を提供する。個別相談なら、面接時間の原則50分で解放されるところが、「サロン」ではランチタイムも含め、ほぼ一日気を張り巡らせていなければならず、しかも“自然体でそこに居る”というのは、十分な臨床スキルが必要とされる。其のため、その日のスタッフ間で互いに調整し、必ず日に何回かその場を離れ、息抜き出来る時間を確保出来るよう促している。息抜きの重要性は、周囲には中々周知されておらず、同じ心理スタッフ間でも経験してみないと理解されない点でもあり、特筆する必要がある。更に、学会発表でも指摘を受けた、危機対応時の問題として、スタッフが非常勤のみと云うのは、甚だ危険でもある。この点についても、大学としての検討課題である。

大学は、これからいよいよ少子化問題と直面、益々多様な学生対応が求められる。不適応を起こす学生の増加も当然に見込まれよう。又、今年から国家資格となる“公認心理師”試験も始められる。そんな中、これからの学生支援の在り方として、心理の専門家が関わる「サロン」の需要はより高まり、その存在はより重要になっていくと思われ、ここに今回の学会発表報告とその実状を紹介する次第である。

引用文献

- 大町・小山・斎藤・中嶋（2008）学生相談機関における社会療法的アプローチ ―ステューデント・サロン活動の試み―. 精神療法, 34(5), 577-584.
- 加藤・田村（2015）カウンセラーが常駐するオープンスペースに関する探索的調査. 学生相談学会第33回大会.
- 中島・坂井・伊藤・永井・石野田・木村（2016）カウンセラーが常駐する談話室における学生支援の事例. 日本心理臨床学会第35回.
- 中島（2017）大学での日常場面における他者とのつながりを支援した一事例―心理スタッフが常駐する談話室における学生支援―. 日本心理臨床学会第36回大会.
- 伊藤・中島・坂井・永井・石野田・木村（2017）心理スタッフが常駐する談話室における活動実践について―3大学の実践事例比較（1）―私立総合大学A大学「ステューデント・サロン」―日本心理臨床学会第36大会.
- 佐藤（2017）心理スタッフが常駐する談話室における活動実践について―3大学の実践事例比較（2）―国立総合B大学の「談話室」において―日本心理臨床学会第36回大会.
- 澤田（2017）心理スタッフが常駐する談話室における活動実践について―3大学の実践事例研究比較（3）―私立小規模C大学「学生サロン」学生相談「フリースペース」のもつ臨床心理的援助機能の検討―日本心理臨床学会第36回大会.

Future prospect of support for university students in Japan —Trend analysis of the general health support center of Meisei University—

JUNKO KIMURA (THE GENERAL HEALTH SUPPORT CENTER OF MEISEI UNIVERSITY)
 KIYOTAKA NAKAJIMA (THE GENERAL HEALTH SUPPORT CENTER OF MEISEI UNIVERSITY)
 JUNKO ITO (THE GENERAL HEALTH SUPPORT CENTER OF MEISEI UNIVERSITY)
 MARKO SAKAI (THE GENERAL HEALTH SUPPORT CENTER OF MEISEI UNIVERSITY)
 TAKASHI NAGAI (THE GENERAL HEALTH SUPPORT CENTER OF MEISEI UNIVERSITY)
 MINA ISHINODA (THE GENERAL HEALTH SUPPORT CENTER OF MEISEI UNIVERSITY)
 MAKOTO KUROIWA (PSYCHOLOGY DEPARTMENT OF MEISEI UNIVERSITY)
 MEISEI UNIVERSITY ANNUAL REPORT ON PSYCHOLOGICAL RESEARCH, 2018, 35, 36—37

Key Words : ibasho(belongingness, safety place, fitting in), adjustment, student support